

# グレアム・グリーンの『スタンプール特急』成立について

## On Graham Greene's *Stamboul Train*

岩崎正也

Masaya Iwasaki

### 1

自伝は「一種の伝記」に過ぎない。伝記よりは事実の誤りは少ないかもしれないが必然的に取捨選択の意図が鮮明になる。自伝は遅く始まり早い時期で終る。臨終のときに回想録を閉じることができないとすれば、どんな結末も恣意的なものになるに違いない。だから、私はこのエッセーを最初の小説が受け入れられた後の失敗の歳月で締め括ることにした。失敗もまた一種の死である<sup>(1)</sup>。

作者自身の選択による任意の生の始まりから任意の死に至るまでの期間を取扱うという制作意図に基づき、『自伝』(*A Sort of Life*, 1971)は『スタンプール特急』(*Stamboul Train*, 1932)を出版した28歳のときの失敗 — 死で終る。一方、『スタンプール特急』は忘却をテーマとして物語が展開する。4月のまだ肌寒い日の午後、イギリスからオリエント・エクスプレスに接続する連絡船が始発駅のあるオステンド港に到着する。パーサーはデッキから船客を一人一人見送りながら、航行中の数時間をともに過したさまざまな国籍、職業をもつ船客とのかかわり合いを回想する。

二人分のベッドがある船室を割り当てられたので不平をこぼしている金持ちの若いユダヤ人、安っぽい白いレインコート姿のコーラス・ガールのコラル・マスカ、何の不満も洩らさなかった白髪の教師リチャード・ジョン、寝室をとるのに2倍もの料金を払った老人、船酔いして指輪をなくした藤色の服の女、クック旅行会の団体客など。最後の乗客のコラルが目の前を歩いて行くと、パ

ーサーは「私を覚えていてくださいよ。また一月か二月したらお会いしましょう」と声をかけたものの、「女を憶えていないだろう」と気がつく。それは「女に目立つところは何もなかった<sup>(3)</sup>」からである。ジョンもコラルと同じように「何の不平も言わなかった<sup>(4)</sup>」。そのため他の世話をやかせる乗客たちと比べてすぐに忘れられてしまうのである。

5年間イギリスに亡命していたために民衆から忘れ去られたツィンナーが社会主義革命を指導するために郷里のベオグラードへ到着する前に起きた暴動は鎮圧され、失敗に終る。ツィンナーは反逆罪に問われて捕えられ、死ぬ。この点でオリエント・エクスプレス内の乗客同士の邂逅と別離による日常レベルでの忘れられることは異なり、時代から忘れ去られることはツィンナーにとって挫折、失敗であり、一種の死である。

全編を貫く「忘却」、とくにツィンナーによって示される忘却 — 失敗 — 死のテーマを解く鍵は作品発表当時、作家としての危機的な状況に陥っていたグリーン自身の失敗の意識にあると考えることができないか。

### 2

オステンドでオリエント・エクスプレスに乗り換えた乗客たちは目的地まで自己の意志とはかかわりなく一定の時間と空間に閉じこめられ、偶然の出会いと別離をとおして記憶と忘却をくり返す運命を強いられる。行きずりの恋もあり、生涯にわたる精神の傷痕も生じる。「お涙頂戴物が欲しければ、すっ飛びメイベルをやれ<sup>(5)</sup>」と社内で噂さ

れるほどの辣腕記者メイベル・ウォリンは同性愛関係にある若いジャネット・パードウから忘れ去られ、コラルは一晩の恋人である金持ちのマイアットから忘れられ、革命家リヒアルト・ツィンナーは彼を慕う民衆から忘れられて、それぞれの「生」を失う。

その他泥棒で人殺しのヨセフ・グリュンリッヒ、大衆作家クウィン・セイヴァリ、牧師オウビー、わがままなピーターズ夫妻など、多数の登場人物に共通する特徴は「忘れられ易さ」であり、あらゆる人間関係の生起、消滅を内部に孕む国際急行列車自体を物語の主人公であると言ってよいが、その運命の結末にあって他の乗客たちの日常レベルを越えて忘れられ易さを失敗から死へと完結させた点でツィンナーを物語全体の主人公と考えることができるだろう。

オリエント・エクスプレスに乗りこむツィンナーのそれまでの生涯を次のようにまとめることができる。

- (1) ツィンナーはパスポートにはリチャード・ジョン、イギリス人教師、56歳として記載。
- (2) もとユーゴスラヴィア社会民主党党主。5年前強姦罪で告発されたカムネッツ将軍の裁判に検事側証人として出廷したが、被告は買収により陪審員から無罪を宣告される。ツィンナーは偽証罪のため逮捕状が出されたのでイギリスへ逃亡、学校教師を務める。国民からは暗殺されたと思われていた。ベオグラードの貧民層から圧倒的な支持を得ている。
- (3) ベオグラードで革命蜂起の指導のため帰国の途上にある。

マイアットはシュタイン経営の干し葡萄会社の買収交渉と自分の代理人であるエックマンの不正糾明とのためにコンスタンチノーブルへ赴くが、到着するまでの3日間はだれにも邪魔されずに車内で相手を攻略する戦術を考えることができるので自分を有利な立場にあると思っている。なぜなら人間の知覚は列車の規則的な震動と騒音にすぐ順応し、自分が停止していると受けとるからである。同じようにツィンナーは敵に気づかれないうちにベオグラードに入って到着宣言をすれば、敵は自分を法廷に立たせるに違いないから、3日間を被告弁護のための戦術に費やすことができるこ

とに満足している。

列車がオステンドをたつてしばらくすると、通路に立ってマイアットと話合っていたコラルは寒さのために床に倒れる。先ほど知り合ったレインコート姿の男が医者と聞かされていたマイアットはその医者であるジョンを迎えに来る。

- (1) 男は立ち止まり、いやいやながら尋ねた。「女の人はどこですか」。彼はマイアットの肩越しに女を見た。彼がためらっているのでマイアットはおこった。「本当に病気なんですよ」とせかせかせた。医者は溜息をついた。「わかりました。行きましょう」。医者は何かの試練にたいしてわが身を励ましていたのかもしれない<sup>(6)</sup>。

一方『権力と栄光』(*The Power and the Glory*, 1940)の冒頭で河港にベラクルス行き船が積荷をおろしている間、司祭はテンチ氏の診察室で休憩している。そこへ母親の治療を頼みに少年が2頭のラバを引いて現れる。

- (2) しかし見知らぬ男は通過できない状況にいやいやながら呼び出されたかのように立ちあがって悲しそうに言った。「いつも起るような気がする。こんなふうに」「船に乗りおくれないういう仕事があるんでしょ」「乗りおくれるでしょ」「船に乗りおくれるようにできているんだ<sup>(7)</sup>」

二つの作品の間にはグリーンが自己の認識を深めた8年の歳月があるが、ウィスキー司祭の宗教的「信仰」とツィンナーの政治的「信条」とを入れ替えれば、両者ともその存在を禁じている国家「権力」と対決しているという点で(1)と(2)の場面にアナロジーが成立する。

イギリスから故郷へ戻るツィンナーは5年の間偽証罪のため警察から追われていることをたえず意識している。だから国境を通過して祖国へ入るまでは、パスポートに記載のとおり、教師リチャード・ジョンとして演技を続けなければならない。半覚醒の状態にあるコラルは混濁した意識をとおして男に憐れみをかける。この憐れみの気持ちはコラルが後にツィンナーを現実的に救い出すことを

予告する。

コラルが「どなたですか」と尋ねるとツィンナーは「医者です」と答え、しばらくして「私の本職は」と言いかけたときに税関職員がパスポート検査を知らせたためにあとの言葉はかき消される。

コラルはマイアットのベッドで一夜をとともに過した翌日、2等車のコンパートメントへバッグをとりに戻り、同室のエミーから罵られている場面で通りかかったツィンナーに助けられる。

このときコラルから再び「『私の本職は』とおっしゃったのはどういう意味ですか」と聞かれてツィンナーは「夢を見ていたんです。仕事は1つしかありません」と答えるが、立ち去ったあと、彼は孤独な自省に包まれる。「仕事は1つしかありません」という言葉はツィンナーにとってまだ完成されていない信仰告白と考えてよい。彼はこれまで複数の職業に就き、複数の責務を担ってきた。両親、患者、生徒、ベオグラードの貧民、世界中のプロレタリアート、神など複数の他者にたいして責務があるにもかかわらず、そのうちのどの責務を果すことにも失敗したことを自覚している。彼が複数の職業、責務の中からただ1つの仕事としてとりあげたのは「社会主義者」だったが、ベオグラード到着の3日前に起きた革命が制圧されたために、ツィンナーはその社会主義者であることにも失敗したのである。なぜなら連絡船のパサーが忘れられ易いことがコラルとツィンナーの2人の共通点である、と予言したように、イギリスに亡命している5年間に故国の貧民層から完全に忘れ去られていたからである。革命鎮圧の報を夕刊で知ったツィンナーの内部には次の停車駅ウィーンで降り、イギリスへ戻るかどうかについて二種の意識が対立する。この葛藤は、グリーン第1作『内なる人』(*The Man Within*, 1929)の発表以来、ほとどの小説作品にもくり返されている「自我の分裂」というテーマの再現である。

『内なる人』に登場するアンドルーズの「物を欲しがる子ども」の自己と「もっと厳しい批評家」の自己の対立は、「今ウィーンで列車から降りて戻るほかはない<sup>(8)</sup>」と勧めるジョンの意識と「もし自首して仲間とともに裁判を受ければ世間は私の自己弁護を聴き入れてくれるだろう」と言い返すツィンナーの意識の対決に引き継がれる。そして

後者の意識が勝利を占めたとき、ツィンナーは始めて亡命者ジョンの位相から脱出するのに成功し、再び生への希望を抱く。

ツィンナーはコンパートメントで自分のスーツケースをあけて金銭を盗もうとしていたグリーンリッヒに、自分は政治犯であり、スーツケースをあけたのは主義のためであり、自分は社会主義者だと言われたとき、その内的葛藤はさらに進展する。彼は、社会主義が真実であることとその信奉者の人間性が不誠実であることとは別問題である点を確認しようとしているが、彼自身も過去にあった、女の子に妊娠させたり、党主のころ虚栄心から1等車で旅をしたことがあるというような不誠実な行為を憶い出すことによって、彼の失敗の意識は罪の意識に変わる。「私はあそこに所属しているんだ。3等車で旅をしなければならぬ<sup>(9)</sup>」。そして無意識のうちに「神よ許したまえ」と祈る。

それとともにツィンナーは自己の運命の結果が死であることを意識する。なぜなら「彼らは二度と私を逃しはしない」と確信しているからである。どんな政治運動の真実もその支持者の人間性により否定されることはないというツィンナーの信条は「秘蹟の有功性は授与者の正統信仰や聖寵の状態如何には依存しない」というローマ・カトリックの規定を通して『権力と栄光』のウィスキー司祭の上に人間性と権能の区別というテーマとして再現されている。

### 3

グリーンはオックスフォード大学を卒業して翌年の1926年3月、タイムズ紙に編集部員として入社した。3年8か月間の勤務生活は「平和な生活の象徴だった」と午後4時から11時まで過ごす編集室に火がおだやかに燃えている暖炉のある風景として作者の意識の上に刻まれている。経済的にも週5ポンドの収入は、下宿の部屋代と朝食に週30シリングを払い、タイムズ社の食堂でとる夕食に約11ペンスしかかからなかったという独身生活を送るのに適当だった<sup>(10)</sup>。

グリーンがオックスフォード在学中に書いた最初の小説 *Anthony Sant* はブラックウェル社から出版を拒否され、未刊に終わっている。これは白人

の両親から生れた黒人の主人公が抑圧された幼年時代と人種差別の学校時代を経て船員生活を送ることによってアウトサイダーの意識から解放されるというように不幸な幼年をテーマにしたものであるという<sup>(1)</sup>

グリーンは1926年7月に第2の小説*The Episode*を書きあげ、ハイネマン社に送る。しかし8か月たっても返事がなく、この間にグリーンは未完の小説3篇を書いた。探偵小説の*Fanatic Arabia*、アフリカ物語の*Across the Border*、12歳の少女が若い家庭教師を殺害する事件の鍵を握る司祭 — という探偵小説の*A Sense of Security*である。

ハイネマン社へ2作目の小説の採用可否について問い合わせると、小包による原稿の返却とともに、次の作品を読みたいという返事が届いた<sup>(2)</sup>。この回答に勇気を得たグリーンは第3の作品に着手するが、これが彼にとって作家的生涯の可能性を占う最初の危機となった。なぜなら「もし3作目が他の作品と同じく不成功に終わったら、永久にこの抱負を棄てよう。当時、タイムズ社の地位が安定して、来年は結婚することもできそうだった<sup>(3)</sup>」と考えたからである。虫垂炎の手術のあと入院中に『内なる人』のアイデアを練り、2週間後に職場へ戻る。

1927年、その前年カトリックに改宗したグリーンはヴィヴィアンと結婚し、午前中は3作目を執筆し、夜はタイムズ社で編集部員として努めるというように幸せな時が続いた。『内なる人』はハイネマン社のチャールズ・エヴァンズの見識により出版され、8,000部以上を売るという成功を作者にもたらし、刊行されたグリーン最初の小説作品となった。数か月後、出版された2作目の小説となる『行動の名』(*The Name of Action*, 1930)を執筆中、グリーンがハイネマン社にたいし、タイムズ社勤務と著作は両立しないと申し出るとエヴァンズは、グリーンがタイムズ社を辞めた場合、3篇の小説にたいする見返りとして3年間ダブルディ社と共同で年に600ポンドを払うことを提案した<sup>(4)</sup>。そこでグリーンは作家としての独立を選んだが、辞職は入社と同じくらい時間がかかったようだ。退職の相談を受た編集次長のジョージ・アンダーソンは、辞めないでいれば、何年か後に投稿欄の編集主任になれるとグリーンを慰留した。

1921年12月31日付で「私は成功した処女作品の作者としてタイムズ社を辞めた」ことが後に失敗となることをグリーンは気づかなかった。「作品のなかには、処女作をもってはなやかに文壇の仲間入りし、批評家や一般読者から第2作を期待して待たれるといった者もあれば、反対に何作目かでにわか重要性が認められ、その結果それまでの作品すべてが改めて見直され、熱心に論じられるに至るといった場合もある」という高見幸郎はグリーンを「彼はどちらかといえば後者にあたると言っていいように思われる」と評価する<sup>(5)</sup>

『自伝』を著した66歳のグリーンはこの点を熟知していて、作家は1作目のときは冒険だから短距離走者であり、2作目の場合は義務だから長距離走者に変身すると記している<sup>(6)</sup>

タイムズ社を辞めたとき、ハイネマン社からすでに3年間の経済的援助の契約をとりつけていたグリーン夫妻はチップینگ・キャムデンにある薬屋根の家に移った。1930年出版の『行動という名』と翌31年の『夕暮れ時の噂』(*Rumour at Nightfall*, 1931)はまったくの駄作で、それぞれ2,000部少々、1,200部しか売れなかった。経済援助の3年が過ぎると、グリーンは再び生計難に陥ったばかりでなく、作家を続けることができるかどうかの危機に直面した。ハイネマン社からの資金援助の見返りとして書いた3番目の小説 — 『内なる人』から数えて4作目 — が『スタンブール特急』である。

#### 4

グリーンは『自伝』の結末で「旧作を読み返すのは私には辛いことだが、『スタンブール特急』の場合はほとんど不可能である。どのページも当時の心配事や失敗の意識を沢山含んでいる」と述べているが、これは『スタンブール特急』を流れる「忘却」を解くヒントがグリーン失敗の意識にあることを示している。

1974年出版のコレクティッド・エディションの『スタンブール特急』の序文の中でグリーンは理性的な回顧として、最初で最後だが、この小説の制作意図は、読者を喜ばせ、運がよければ映画化されるような作品を書くことだったと記している。

この点で全編を映画的手法によって3日にわたるオリエント・エクスプレスの動きを描き出したことが希望を2つとも実現した原因になるだろう。オリエント・エクスプレスは「当時としては、豪華客船とともにもっともロマンティックで、デラックスな旅行方法であった<sup>(17)</sup>」からである。

グリーンは列車物の着想を得たときに、母に宛て次のような手紙を送った。「私は‘furrin’ parts’乗車の希望に夢中になり、ワゴン・リ社に手紙を書いて、動き全体がオステンドからコンスタンチノーブル行きオリエント・エクスプレス内で生じるような小説を来年に計画しています。社は来年往復乗車券を私に提供してくれるでしょうか。もしそうなら大へんおもしろいのですが<sup>(18)</sup>」。

グリーンは申し出にたいしてドイツ鉄道はフリー・パスを提供したが、フランス鉄道は規定によりパスを拒否したので、グリーンはコンスタンチノーブルまでの全線の乗車券を買う経済的余裕がなく、ケルンまでの3等乗車券を購入した。『グレアム・グリーンの世界』(The Life of Graham Greene, 1989)を書いたノーマン・シェリーは「幼年時代から列車の旅は休日、親戚訪問という楽しみの一部であり、後にはヴィヴィアンへの求婚の重要な側面となった<sup>(19)</sup>」と、列車の旅がグリーンに小説のさまざまなモチーフを提供しただけでなく、ヴィヴィアンや母に多くの見聞を書き送る場になったことを指摘している。

グリーンが終点のコンスタンチノーブルまで全線乗車を果たしたのは『逃走の方法』(Ways of Escape, 1980)を上梓する数年前のことだが、『スタンブール特急』執筆当時の作者は一部しか乗っていなかった。だから彼は、ヴィヴィアンと自分の2人とも気に入りのレコードであるホネッガーの「パンフィック 231」を聴きながら制作を続けたという<sup>(20)</sup>。

その制作当時、グリーンは深刻な経済的苦難に見舞われて、弟のヒューに次のような手紙を送る。「はっきり言うと私たちは破産しそうだ。先週ある人に泊りに来られたが、その人には君と同じくらい会いたくなかった。私たちは君を4晩も泊めてやる余裕はない。(中略)もし君がクローバラで1日長く泊って、1日早くレイモンドの所へ行くことができれば、2晩なら泊っていい。2晩な

ら家計をふやさずにやりくりができる。』<sup>(21)</sup>

生活費を稼ぐためにグリーン夫妻は新聞のエッセー・コンテストに応募を始めたが、それにも失敗すると、グリーンは真剣に大学教員の職を探している。依頼を受けたエドモンド・ブランデンはグリーンを東大教授齋藤勇に紹介しようと言った<sup>(22)</sup>。1932年7月17日に『スタンブール特急』の執筆完了。8月4日の日記に、原稿をハイネマン社に送付、と記す。

出版社から連絡を待っている間のグリーンは神経は過敏の極限に達したという。8月17日付の日記には「不安は怖ろしいくらいになった<sup>(23)</sup>」と記している。

グリーンはロンドンへ『スタンブール特急』の出版交渉に出かけたとき、ハイネマン社からあと1年間300ポンドの援助を受け、ダブルディ社からはあと2か月間だけ支払いを受けるが、その代り、さらに2冊の小説を書かなければならないという契約を結んだ。

## 5

「仕事は1つしかありません」というツインナーの信条とその1つの仕事にさえ失敗したという「死」の意識は互いに綱交ぜになって、『スタンブール特急』発表当時のグリーンを苦しめたはずである。大学卒業以後、グリーン自身が経験してきた職種は、英米タバコ会社員、家庭教師、「ノッティンガム・ジャーナル」社員、「タイムズ」社員、作家 — 彼が他人に就職を依頼した職種を入れればさらに多くなる — というふうに複数にわたるが、この小説を出版したとき、タイでの大学教師職の斡旋を依頼した「友人からの好意的な返事が届くのが遅すぎたために私は作家稼業から救われそこなった<sup>(24)</sup>」と、作家をただ1つの仕事にすることになった成り行きを回想している。

『スタンブール特急』が図書協会の推薦図書となったため、ダブルディ社は支払い契約をあと1年更新した<sup>(25)</sup>。その直後、J. B. プリーストリーが作中人物セイヴァリの件で名誉毀損で告訴すると出版社へ連絡を寄こしたので、エヴァンズの「ハイネマンが著者を1人失うとすれば私を失うほうがよい」という判断により、グリーンは電話をと

おしてページのさし替えを伝えた。初版 13,000 部 — グリーンは14歳のときに読んだ『ミラノの毒蛇』(*The Viper of Milan*, 1906) の結末から勝利のあとに破滅が来るという振り子の反転の運命が人生の真理であることを、「作家にとって成功はつねに一時的であり、成功とは遅れてくる失敗に過ぎない<sup>en</sup>」と認識し、ツィンナーの運命としての「忘れられ易さ」=失敗=死の意識を作家として、時代から忘れ去られること=失敗=死というふう<sup>en</sup>に自己にたいして意識したのである。

(1990. 1. 26 受理)

### 註

- (1) Graham Greene, *A Sort of Life*, (London: The Bodley Head, 1971), p. 9.
- (2) Graham Greene, *Stamboul Train* (1932; rpt. London: The Bodley Head, 1974), p. 4.
- (3) *Ibid.*, p. 5.
- (4) *Ibid.*, p. 6.
- (5) 北村太郎訳『スタンブール特急』(早川書房、1980), p. 40.
- (6) Graham Greene, *Stamboul Train*, p. 24.
- (7) Graham Greene, *The Power and the Glory*

(1940; rpt. London: The Bodley Head, 1971), p. 13.

- (8) Graham Greene, *Stamboul Train*, p. 81.
- (9) *Ibid.*, p. 136.
- (10) Graham Greene, *A Sort of Life*, p. 171.
- (11) Graham Greene, *Ways of Escape*, (London: The Bodley Head, 1980), pp. 12-13.
- (12) Graham Greene, *A Sort of Life*, p. 82.
- (13) *Ibid.*, pp. 182-183.
- (14) *Ibid.*, p. 193.
- (15) 青木雄造編『グレーム・グリーン』(研究社、1971), p. 252.
- (16) Graham Greene, *A Sort of Life*, p. 196.
- (17) 青木雄造編『グレーム・グリーン』, p. 141.
- (18) Norman Sherry, *The Life of Graham Greene* (London: Jonathan Cape, 1980), p. 408.
- (19) *Ibid.*, p. 407.
- (20) *Ibid.*, p. 408.
- (21) *Ibid.*, p. 416.
- (22) *Ibid.*, p. 417.
- (23) *Ibid.*, p. 425.
- (24) *Ibid.*, p. 214.
- (25) Graham Greene, *A Sort of Life*, p. 213.
- (26) *Ibid.*, p. 214.
- (27) *Ibid.*, p. 215.